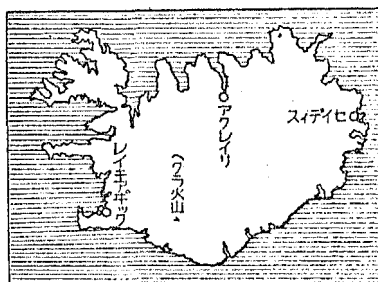


アイスランドの大間歇温泉

横山 又次郎



今から十六年前、余が歐米漫遊に出掛けた時に、アイスランドの有名な間歇温泉の見物を思ひ立つて、丁抹コーペンハーゲンの港を、僅に一千百六十六噸のセレスといふ小汽船で、出たのが八月二十一日であつた。それから船は翌二十二日の夜半にスコットランドのリース港に入つて、此を又出たのが二十五日であつた。それからアイスランドの東岸のセイデス峽灣に入つたのが二十九日であつたが、更に島の北岸に廻はつて、數個所に着けて、西岸の島の都のレイキャヴィックに着いたのが九月五日であつた。それでアイスランドの沿岸廻はりをするのに六日掛つたわけである。窮屈な小汽船上の六日は可なりに長いやうに思つたが、是れによつて圖らずも沿岸の諸港を見物したのは思ひ掛けない儲け物であつた。尤も諸港と言つても、人家は村落的に集合するのみで中で稍見るに足るのは北岸のアクレイリのみであつたが

それでもその人口は僅に三千といふのであつた。

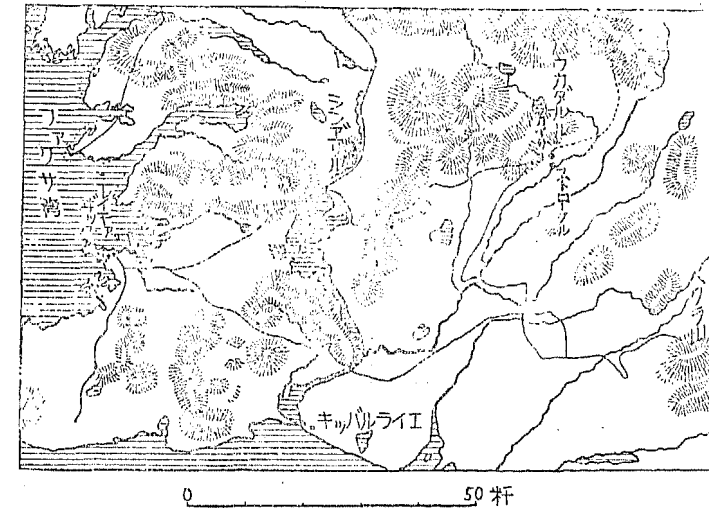
都のレイキャヴィックは當時人口一萬の市街地で、アイスランドに取つては最大のものであつた。アイスランドは先づ無樹木の國といつてよい。

樹木があつてもまばらに生へてゐて、而も多くは灌木としか見られない。他は草地か又は黒い玄武岩の裸出地である。そして草地も、羊を放牧してない所は、稍草地らしく見えるが、羊のある所は草が之に喰ひ取られて、恰も吾が庭園の芝生のやうである。レイキャヴィック附近には、殊に羊が多いから、五寸と草の伸びてゐる所を見出すことは不可能であつた。樹木のないのは、蓋し冬は大して寒くない代りに、夏が意外に涼しいからであらう。予がアイスランドに止まつたのは九月二十二日までであつたが、それまでの氣溫は意外に低く、大抵華氏の五十度内外で、一度日中に六十度を越したことがあつたが、その他は多く五十度以下で、或る朝の如きは四十一度に下つた。

予がアイスランドに渡つた目的は、前にも言た間歇泉の見物であつたから、その所在を聞く、レイキャヴィックから東方吾が二十六里のハウカダルールといふ地と知れた、そこで九月九日に、一英人と共に、案内者一名を雇うて、馬上で出掛けた。アイスランドの旅行は皆馬でするので、馬に乗れない者は歩行くの外ないが、川には多く橋がないから、之を徒渉せねばならぬのみならず、宿泊所も馬の行程によつて其所在が極まつてゐるから、非常に急ぐか、然らざれば夜晩くなるまで

歩行くかしなければ、宿屋に着く事の出来ない處がある。それに島の内部は人家が極めて稀少だから、普通の民家も見當らないといふ不自由もある。

初日には予等は約十二里を行つて、シンベリルといふ所の寺僧の住宅に、泊めてもらつた。此の家は旅宿を兼ねてゐたが、粗末な小客室が二あるのみであつた。



近附 - サイガの島ドンラスイア

シンベリルには同名の湖がある。湖はシンベリル谷の行き詰まりであるが、此の谷は幅一里半で兩側は岩の絶壁に界されて居る。此の絶壁は大斷層線に外ならぬ。そして谷中にはその兩側に駢走した龜裂が數多あつて、その底は深い水溜りになつて居る。それで道路以外の地は、やたら歩行をしては危険である。一度放牧の馬が落ち込んで、救ひ上げることが出来なかつたといふ話もある。

九月十日は更に十四里を乗つて、間歇泉のある地のハウカダールに晩の七時に着いた。馬上で

ありながら、斯く晚くなつたのは、惡路で馬を急がせることは出来なかつたからである。

予等が二日かゝつて通過して來た地は、波狀の玄武岩地で、山といふ程のものは道に當つては、殆どなかつた。

ハウカダールには僅に數軒の家があつて、その一はホテルであつた。尤もホテルと云つても、歐洲大陸の山間に見るものと同一で、極めてお粗末千萬のものであつた。

間歇泉はホテルの直ぐ附近に在つたが、此の邊一帶の地は大體平で、後方（北方）には丘陵を控えてゐた。そして地面は玄武岩の裸出地で、目を樂ましむるものは皆無であつた。

翌十一日は霧日で頗る寒かつたが、予に取つてはゲイシル見物の大切な日であつた。此の温泉は明治二十九年以前は、大抵規則正しく一日に一回噴いてゐたが、同年の大地震以來、噴出が不規律になつて、十日二十日も噴かないことがあるとの話であつた。吾々は豫て之を噴かせるには石鹼を入るればよいと聞いてゐたから、ホテルに所用の洗濯石鹼二十ポンドを賣つて呉れと申し込むと、相憎十ポンドしかないと言つた。それで附近の家を聞き合せて見たが、皆孰れも持ち合せがないといふので、連れの英人は遠方まで之を捜しに行つた。それでも見當らないので、石油一罐を買つて來た。石油が石鹼の代用をするや否やは不明であつたが、兎に角得られないのであるから、止むを得ず、此の二品を持つて、大ゲイシルといふのに出掛けて行つた。

大ゲイシルはホテルから約三町の東に在つて、豫て教科書で見た通りに、極度の平圓錐の上に在つて、湯壺は徑約八間の浅い鉢形盆地で、その中心から下に向けて、徑約二間の圓い直立孔があつた。湯壺中の湯は碧色透明で、少しづつ直立孔から出て來るに隨つて、口邊から溢れてゐた。又口邊一面珪華が沈澱して、圓錐その物も此の珪華で出來てゐるやうであつた。湯の溫度は手を入れる、ことの出來ない程高かつた。

予は案内者に、石油と石鹼とを中に入れた。けれども何の反應もなかつたから、是れはどうしたものと言ふと、案内者は噴くにしても一時間の後か二時間の後か、判らぬと言ふから、それから他のゲイシルでも檢分しようと言つて、附近のストロツクルといふのに行くと、是れは大ゲイシルより遙に小で、明治二十九年以來全く噴かなくなつたと聞いて、更にその傍のリトリといふ徑二尺の小孔に行くと、案内者が十ポンドの石鹼の中から取つて置いた小塊を投げ込むと、忽ち非常な反應が起つて、湯が五六尺の上まで噴き上げた。此の時大ゲイシルの方に當つて、轟鳴が聞えて、その湯が沸騰し始めたから、予等は急急で之に駆け附けると、湯は再び鎮靜してしまつた。詰まる所、石鹼の分量が足らなかつたのである。石油に至つては全く無効であつたらしい。

此の地には、もう一つ小ゲイシルがあつた。それはオセリホーラと稱へて、一晝夜に四回規則正しい噴出をするものであつた。湯は七八尺の上まで揚つた。

予は大ゲイシルの噴出を見ることが出来なかつたのに失望して、翌日はシンベルに引き戻し、翌々日はレイキヴィックに引き戻した。すると英國から新にゲイシル見物に來た英人に出會つた。それでその英人に石鹼はレイキヤヴィックで調べて行けと注意してやつた。その爲にその英人は首尾能く噴出を見たさうである。

アイスランドのゲイシルは何れの教科書にも見えて、極めて有名であるが、予が行つた當時の状態では、見物甲斐のないものであつた。そして予の様に、吾が邦で既に鬼首の吹上泉を見たものには、存外詰まらないと思はれた。加之ならず島が到る處岩石が裸出して、殺風景なものには尙更詰まらなく感じた。尤も、さういふ詰らない所を見るのが即ち詰まる所で、それが又一興であると言へば、それまでゝある。

アイスランドのゲイサーが盛んに噴出してゐた頃の状況はフナルプス海軍大佐の一八五九年旅行の記事(本誌第二〇七頁以下)に頗る面白く記載されてゐるから本篇と並讀されたい